

「ご挨拶」

東京北見会会長

井戸 理恵子



菊薫る季節となりました。菊と云えば、「北見市の花」と指定されていたもの。北見を思う方々には自ずと懐かしい「菊まつり」を彷彿とされるのではないのでしょうか。記憶の中に眠る「菊まつり」。NHKの大河ドラマを題材にした菊人形を中心にした時代時代の背景も映し出されていました。真つ青な高い空と黄や紅のコントラストが甦ります。

今年の猛暑の影響はこの秋、農作物も草花も動物もヒトさえも本能を狂わされたように様々な被害が生じています。北見の菊は果たして美しく咲いたのでしょうか。

さて、昨年十一月の総会にて泉田会長の後任を受け、東京北見会の会長となりました。会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。また、未だご挨拶が叶わぬ会員の皆様方には誌上をもって、改めてご挨拶させていただきます。日頃より東京北見会の活動に、ご理解とご協力をいただきありがとうございます。

東京北見会は発足より、三十三周年を迎えました。

世の中は政治も経済も安定を欠き、未だ混沌とした時代を送っておりません。こうした時代だからこそ、一人一人が足元から自分を見つめ直すことが

必要と思われれます。幸い、我々には故郷があります。首都圏だけを見つめていては見えないことも小さな単位である町の連続の中にその要因や原因を見いだすことも出来るもの。かつて日銀総裁だった澁澤敬三は癌細胞と癌を消滅させる血清のモデルから、都市の癌の増殖を食い止めるためには地方の力という血清が必要だと云っていました。「地方の力」とは都市の中では生まれぬ地方ならではの、「再生させるため」の考えであったり、古い知見であったりします。

技術の進化と共に物事の基礎を疎かにする傾向が強くなってきています。学問も社会もみな楽にコトを為そうとする。しかしながら、同じ風土の中で育った「世代の異なる人々」と共に今この都心で「小さな単位で物事を考え、組み立てて行くこと」を楽しむことによって、生まれる「生きるために必要な価値」が必ずあります。重要なのは「楽しむ」こと。

「楽しむ」とは「楽をする」ことではなく、一人一人が自らを知ることによって、周囲がその人となりを知り、互いのコミュニケーションが生まれ、調和を奏で始めるコトです。

そこで従来東京北見会が担ってきた、或いは求められてきた役割のひとつ

つである「企業誘致」を振り、新たに「人間誘地」を会の中心に据えていきたいと思えます。「企業誘致から人間誘地へ」。大きな単位を動かすことは大変な苦勞がつきまとい、誰もが出来ることではありません。しかしながら、一人の会員が一人二人と北見のファンを作っていく。北見に友を連れて行く。そして自らも北見に赴く。そうした積み重ねの上に故郷が活性化し、自らも楽しめる。同じ故郷を共にするもの同士が「脚下照顧」し、故郷を思う末に北見市の職員の方を始め、北見市に棲む市民と東京北見会との絆が生まれ、故郷会が新たに機能し始めるのだと思うのです。ここには単に「観光」という価値だけではなく、インターン、ウターン、移住計画なども生じてくるかと存じます。勿論、会の諸先輩方の功績、初心は忘れる事なく、慎重に進めていきます。会員の皆様には今まで以上に気軽に会の活動に参加していただき、懐かしいコトバの数々を交わして頂きたく存じます。

最後に皆様のご発展、ご健勝を祈念致しまして、挨拶とさせていただきます。

